

2017年1月22日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 7章1～16節

説教：父アブラハムの信仰

はじめに

イスラエルは小さな国でしたから、外国の軍隊に何度も攻められて捕虜として外国に強制的に連れて行かれることを歴史の中で何度も経験しました。補囚の民として何年も苦しい生活を強いられます。それでも、何世代か経つとイスラエルに戻る事が許されるようになります。その頃にはもう、ヘブル語ではなくギリシャ語しかしゃべれません。国に戻ると、次第にヘブル語を話す人と、ギリシャ語を話す人の二つのグループが同じ町に住むことになります。

このことは教会にも大きな影響を及ぼします。ことばが違いから二つのグループが形成され、微妙な緊張感が生まれます。それがとうとう、ギリシャ語をしゃべるやもめの所に食事の配給が届かないという問題に発展します。苦情を受けた教会は相談の結果、食事配給部門を独立させ、信仰と聖霊に満ちていたステパノをリーダーに選び管理を委ねることにいたしました。

ステパノは早速ギリシャ語をしゃべるユダヤ人の地域に出かけ精力的に活動します。そこにはユダヤ教の人たちがおおぜい住んでいて、キリストのことを語るステパノのことをおもしろく思っていないことあるごとにステパノに議論をふっかけ、追い出そうとします。でもステパノが力強くキリストを証しするので議論では勝てない。こうなると力づくです。ステパノを逮捕させ、裁判にかけ、うその証言をさせてステパノを追い込もうとします。その裁判の席でステパノが何を

語ったのか、これから三回に分けて見て参ります。今日はその一回目になります。

1 ステパノが訴えられた理由

そもそもステパノはどのような罪で訴えられたのか、まずそのことを確認しておきます。6章13, 14節にあります。「そして、偽りの証人たちを立てて、こう言わせた。「この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。『あのナザレ人イエスはこの聖なる所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」

ステパノが、「モーセが伝えた慣例を変えてしまう」と言ったことが訴えられた理由のようです。ではいったい、「モーセが伝えた慣例」とはなんのことなのか。

答えは彼らが訴えていることばにあります。「あのナザレ人イエスはこの聖なる所をこわすとステパノが言っているのを聞いた。」

聖なる所とは、神殿のことです。当時、エルサレムにはりっぱな神殿が建っていて、人々はそこで礼拝をしていました。その神殿は、どうやってできたのか。さかのぼっていけばモーセにたどりつきます。彼は、神からの指示に従って神殿のはじまりである幕屋をつくり、その前に集まって人々が礼拝するように語りました。それ以来ユダヤ人は幕屋で、そして後には神殿で礼拝することにこだわり続けます。

そういう背景があるので、ステパノが建物の神殿をこわすと言ったのなら大問題にな

ります。確かにモーセが伝えた慣例を変えることとなります。もしそうなら、神をけがしたことになりますから、律法によれば石打の刑で殺されることとなります。ステパノは本当にそんなことを言ったのでしょうか。

2 ステパノの証言

1) 神がアブラハムに語ったこと

裁判長である大祭司は、ステパノを証言台に立たせ、訴えられた内容は事実である尋ねます。そこでステパノは、アブラハムの生涯から語りはじめました。どうしてアブラハムなのでしょう。ステパノは、「モーセが伝えた慣例を変えようとしている」という疑いをかけられているのです。であれば、モーセのことを語ると誰でも思うわけですが、アブラハムから始めます。もちろん、この後にモーセのことは出て来るのですが、アブラハムが先です。

その理由を考えるために、6, 7 節に注目します。「また神は次のようなことを話されました。『彼の子孫は外国に移り住み、四百年間、奴隷にされ、虐待される。』そして、こう言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしがさばく。その後、彼らはのがれ出て、この所で、わたしを礼拝する。』」

この中の二重かぎ括弧のことばは、神がアブラハムに語った内容です。そこには、「彼の子孫は外国に移り住み」とあって、創世記に書かれている内容をステパノは手際よくまとめて語っています。イスラエルに大飢饉が起きたとき、食料を求めてエジプトに避難したことがきっかけで、アブラハムの子孫はそこに住むようになりました。

続く出エジプト記を開くと、そこには移り住んだ彼らが四百年後にどうなったかが書

かれています。最初はエジプトに好意的に迎えられたのですが、年月が経つうちに次第にイスラエル人は奴隷状態になってしまいました。そんなときモーセが生まれ、彼が八十歳になったとき、彼がこのイスラエルの民をエジプトから導いていくことは、皆さんもご存じのとおりです。

2) アブラハムはどこで礼拝したのか

そのモーセが活躍するのは、アブラハムの時代から数えておよそ五百年後のことです。言い換えれば、五百年も先に起こることを神はあらかじめアブラハムに語ったこととなります。そこではこう語っていました。「彼らは逃れ出て、この所で、わたしを礼拝する。」

アブラハムはこのことばを聞きましたが、実際には自分の目で見ることはありません。また、「この地をあなたとあなたの子孫に財産として与える」と約束されていたのですが、そのような財産は与えられず、ただ自分の金でお墓に葬られて地上の生涯を閉じました。

イスラエル人は、父アブラハムと呼んで自分たちこそアブラハムの子孫であるとの強い誇りを持っています。そのアブラハムは何を信じていたのか。アブラハムは神殿で礼拝したのでしょうか。いいえ、ところどころで小さな祭壇を築いて祈ることはありましたが、神殿はありませんでした。アブラハムは、礼拝すべき自分の土地が与えられたのでしょうか。いいえ。ありませんでした。イスラエルの民が、神殿をかたどった幕屋で礼拝するようになるのはずっと後のことでした。

3 イエス・キリストのからだ

1) 建物の神殿

アブラハムのことから二つのことが見えてきます。一つ目。人はなぜ神を礼拝するのか。その理由です。神はアブラハムに語りました。「彼らはのがれ出て、この所で、私を礼拝する。」神を礼拝するのは、だれかに無理矢理させられるものではないということです。救われたことがうれしくて、するなと言っても自然に神を礼拝したくなる。これが礼拝の本来の姿です。

ところがユダヤ人はどうしたか。心のことはどうでもよい。とにかく形の礼拝を大切にします。その結果、神殿という建物があるのかないのか、そのことが気になってしょうがありません。

アブラハムのことから見えてくることの二つ目。どこで礼拝するのか。ユダヤ人は、建物の神殿にこだわります。ところがアブラハムの時代はどうであったのか。礼拝する幕屋もなければ神殿もない。いやそれどころか神殿を建てる土地さえも与えられませんでした。建物の神殿がなくても彼は救われていました。約束の土地は与えられていませんでしたが、彼は信仰者でした。ということは何がわかるか。神は、建物としての神殿を大切にしないでいいと言っていたのではない。神がモーセに幕屋をつくるようにと言ったのは、もっと別の意味だったことになります。ではそれはなんのことか。建物のことではないというのなら、私たちはいったいどこで礼拝するのでしょうか。そのことを最後に確認します。

2) 真の神殿

イエスが神殿のことにに関してなにを語ったのか。それを見るのがもっともわかりやすいでしょう。「この神殿をこわしてみなさいわたしは、三日でそれを建てよう。」(ヨハネ

2章19節)

この裁判では何が争われていたのか。突き詰めていくなら、イエスが語ったこのことばがどのような意味であったのか。それに尽きると思います。イエスは「この神殿をこわしてみなさい」と言われました。ステパノを訴える者たちは、このことばをねじ曲げ、「あいつらは神殿をこわせと言っている」と証言しました。好意的な言い方をすれば、無理もありません。建てるために四十六年もかかったのですから、それを三日で建てると言うのです。頭がどうかしていると思われるだけでしょう。

しかし、イエスの頭がおかしいのではありません。かたかったのは私たちの頭のほうでした。イエスがどのような意味で語ったのかは、続くヨハネは2章21、22節にはきちんと解説があります。「しかし、イエスご自分のからだの神殿のことを言われたのである。それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われた事を思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた。」

弟子たちは、よみがえられたイエス・キリストこそ、私たちが礼拝すべき本当の神殿であるとわかりました。加えて、旧約聖書にあるアブラハムのこともモーセのことも、すべてよみがえられたキリストを通して読み直したときに、真の意味を理解いたしました。ステパノもそこから語りました。

3) アブラハムの信仰

アブラハムはキリストのよみがえりを信じて、墓に葬られました。礼拝すべき場所は、建物の神殿ではない。よみがえられたキリストのからだであることを信じていました。だ

から地上でなにも与えられなくても、それを受け入れ、天の故郷にあこがれていきました。

私たちはどうでしょうか。建物を見るとどうしてもそれがすべてであるかのように思えます。もちろん神が、この教会の建物を与えてくださいました。でも礼拝するのはどこですか。

私たちはいま礼拝するためにここに座っています。いったい何を礼拝しているのでしょうか。イエスが十字架で死んだままだったなら、墓からよみがえられなかったなら、むなしい中身の無いものを礼拝していたことになります。もしそうなら何と無駄なことをしているかとなる。

でも決してむなしいものを礼拝しているのではない。この方がよみがえられて、生きておられるから礼拝します。本当でしょうか。信じられないときがあるかもしれません。でもヘブル書12章1節に、「このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから」とあります。自分の信仰が弱くなるようなとき、私たちは大先輩であるステパノが殺されることを恐れず、主を証ししていたのを思い出すことができます。

私たちは救われた恵みを思い起こし、感謝しつつ真の神殿となられた主イエスを礼拝したいと願います。